

特定外来生物

クビアカツヤカミキリ

昆虫綱 コウチュウ目 カミキリムシ科 *Aromia bungii*生態系被害防止
外来種リストの区分

その他の総合対策外来種

日本の侵略的外来種ワースト 100

世界の侵略的外来種ワースト 100

基礎情報

原産地

・中国、モンゴル、朝鮮半島、台湾、ベトナム

現在の分布

- ・世界では、イタリア、ドイツ(一時的)に侵入
- ・国内では、福島県、群馬県、埼玉県、東京都、大阪府など、12 都府県で被害が発生している。
- ・県内では、名古屋市および尾張西部地区(津島市、愛西市、弥富市、あま市、大治町、蟹江町、飛島村)で確認されている。



侵入の経緯

- ・2012 年に愛知県、2013 年に埼玉県、2015 年に群馬県、東京都、大阪府、徳島県、2016 年に栃木県で、それぞれ初めて被害が確認された。
- ・輸入木材や梱包用木材、輸送用パレットなどに幼虫が潜んだまま運ばれてきて、国内で成虫に羽化し、繁殖したと考えられている。

形態

- ・体長 22~38mm。
- ・体全体は光沢のある黒色。成虫の前胸背板(首に見える部分)は赤色。左右に浅い窪みを持ち、両側面に頑丈なとげ状のコブをもつ。
- ・触角は黒色でオスは体長の 1.7 倍ほど、メスは体長より少し長い程度。脚は青みを帯びた黒色。
- ・幼虫はイモムシ状で樹木内に入り込む。

【幼虫】



前胸背板(首に見える部分)が赤色



(写真提供:戸田尚希氏)

生息環境

- ・サクラ、モモ、スモモ、ウメ、ハナモモなどのバラ科樹木や、カキ、ポプラなどの樹木に穿孔する。

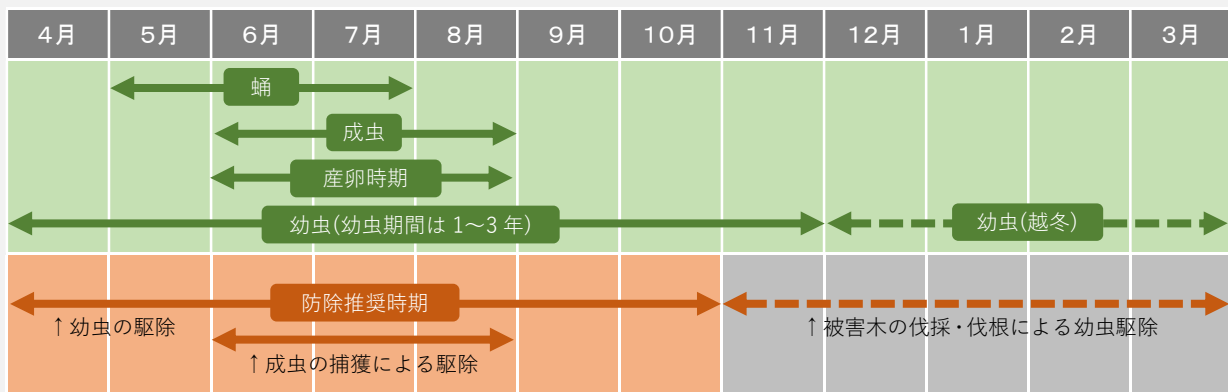
生態・ライフサイクル

- ・サクラ、モモ、スモモ、ウメなどのバラ科樹木や、カキ、ポプラなどの樹木に穿孔し、加害する。
- ・幼虫は、樹木の生木(形成層付近の辺材)を摂食し、フラス(フンと木くずが混ざったもの)を排出しながら、樹体内で1~3年かけて成長し、蛹となる。幼虫の活動期は春から秋(おおむね4~11月)にかけてであり、この間にフラスを排出する。
- ・越冬や蛹化の際は、より心材に近い位置に部屋を作って移動し、石灰質の蓋をする。
- ・蛹は6月中旬~8月上旬に成虫となり、成虫は脱出孔から樹体外に脱出する。
- ・メスの成虫は交尾後、幹や枝の樹皮の割れ目などに産卵する。卵は8~9日後にふ化し、新しく生まれた幼虫は樹体内に食入する。なお、メスは、1頭あたり1000個近くの卵を産むこともある。
- ・成虫の寿命は、野外では1ヶ月程度であり、成虫で越冬はしない。
- ・成虫の動きは素早く、驚くと飛ぶこともある。



被害を受けた樹木（根元にフラスが堆積）

【ライフサイクル・防除推奨時期】



類似種との識別ポイント

- ・類似種として、チャイロホソヒラタカミキリ(在来種)、ホタルカミキリ(在来種)、クビアカトラカミキリ(在来種)がいる。これらの類似種はクビアカツヤカミキリ同様、成虫の前胸背板(首に見える部分)が赤色を呈しているが、体長15mm以下と明らかに小さい。
- ・クビアカツヤカミキリでは前胸背板の左右の両側面に頑丈なとげ状のコブがみられるが、前述の類似種にはとげ状のコブがみられず両側面は滑らかである。



クビアカツヤカミキリの前胸背板

哺乳類

鳥類

は虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類

クモ類

貝類

植物

影響・被害

- ・幼虫が生きた樹木の内部に入り込み、1～3年かけて樹木の内側を食い荒らす。在来のカミキリムシ類よりも1本の木に穿孔する幼虫の数が非常に多く、また形成層（樹体内の水分・養分の通り道）付近を食害するため、被害が進行した樹木は水分や養分を吸い上げられなくなって枯死してしまう。
- ・公園や街路などのサクラが加害されると景観が悪化し、枯枝が落ちて人がケガをするおそれがある。
- ・サクラ、モモ、スモモ、ウメ、ハナモモなどのバラ科の果樹を加害し、農業被害をもたらす。
- ・野生のサクラ類への被害や、在来カミキリムシとの競合など、生態系への影響が懸念される。

名古屋市の被害樹木数（年度別）

年度	地点数	本数
2019	13	48
2020	7	35
2021	13	61
2022	14	29
2023	1	64
合計	48	237

被害樹木数（樹種別）

樹種	本数
サクラ	194
モモ	19
ウメ	18
スモモ	6
合計	237

・クビアカツヤカミキリ対策会議資料より

・2023年度は6月末時点の値

・同一地点で年々被害樹木が増えた場合、「地点数」は初年度のみ計上
「本数」は増えた年度ごとに計上

名古屋市内における被害樹木数

生息・被害の確認方法

- ・サクラ、モモ、ウメなどの根元を目視し、散乱・堆積するフラス（フンと木くずが混ざったもの）の有無を確認する。排出されたてのフラスはカリントウ状だが、時間が経つと風化して顆粒状になる。
- ・フラスが溜まっている場所の上方の幹や枝には、フラス排出孔がある（フラスが付着していることが多い）。過去に成虫が羽化したことがある木には成虫脱出孔（楕円形で長径2～3cm）がある。目線より低い位置に多いが、高い位置に穿孔することもあるので注意が必要。地表に露出した根にも穿孔する。
- ・既存の研究調査に関する文献や目撃情報をインターネットや図書館で探す。
- ・地域住民や農業従事者、専門家などを対象に聞き取りやアンケート調査を行う。

クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）のフラス



- ① 幼虫が成長するとフラスが大量に排出される
- ② フラスの粒はゴマ粒をスライスしたような形状

ゴマダラカミキリ（在来種）のフラス



- ① フラスはそれほど大量に排出されない
- ② フラスは繊維質を多く含む

防除方法

- ・成虫は、見つけ取りや樹木へのネット巻き付け等により捕獲する。または薬剤散布により駆除する。
- ・幼虫は、被害初期の樹木については、刺殺や掘り取り、薬剤の注入により駆除する。
- ・被害が大きい樹木については、被害木を伐採したのち、破碎・焼却・くん蒸により樹体内の幼虫を駆除する。

推奨時期

- ・成虫は、6～8月の発生時期
- ・幼虫は、幼虫の動きが活発になり、フラスを排出する4～11月
- ・被害木の伐採は、拡散を防ぐため成虫の発生しない時期（9～4月）に行う。

具体的な防除方法

対 象	方 法	概 要	留意事項
成 虫	見つけ探り	野外で成虫を見つけたらすぐに捕獲・殺処理する。殺処理は、踏みつけあるいはハンマー等を使用する。	捕獲の際に手指を咬まれケガをするおそれがあるため注意する。
	樹幹へのネット巻き付け	成虫の羽化前に樹幹にネット(目合 4mm 以下の防風ネットなど)を巻き付ける。定期的に見回り、羽化した成虫がネット内にいればすぐに捕獲・殺処理する。殺処理は、踏みつけあるいはハンマー等を使用する。	捕獲の際に手指を咬まれケガをするおそれがあるため注意する。 ネット上端はひもやガムテープで、ネット下端はペグ等で地面に固定する。 樹体からの脱出時に噛み切られないよう、幹とネットの間に隙間を作るように巻く。
	樹幹への薬剤散布	成虫発生時期に調整希釈した薬剤を木全体に複数回散布する。	薬剤使用時はゴーグル、マスク、雨合羽などを着用する。
	成虫脱出孔の封鎖	幼虫は蛹室をつくと同時に、羽化後に脱出するための孔(脱出孔)を作る。羽化より前に、樹木切口被覆材などで脱出孔にフタをして脱出を防ぐ。	－
	生物農薬	昆虫病原性糸状菌が付着した不織布を樹幹の分枝部分等にかけて設置する。成虫が触れることで感染し、約 2～3 週間で死亡させる。	生きている菌を使った製剤のため、入手後すぐに使用する。
幼 虫	刺 殺	フラス排出孔からフラスを掻き出し、長い針金などを入れて孔の先端にいる幼虫を刺殺する。	フラス排出孔が屈曲し、針金が届かないことがある。
	掘り取り	ノミやドライバーでフラス排出孔周辺の樹皮を剥ぎ、新鮮なフラスが詰まっている方向に樹皮を剥ぎ続けて、孔の先端にいる幼虫を掘り取る。	木の外観を損ねる。また、樹体を傷め、雑菌等が入りやすくなるリスクがある。
	フラス排出孔への薬剤注入	フラス排出孔からフラスを掻き出し、薬剤を注入して孔の中の幼虫を駆除する。	薬剤使用時はゴーグル、マスク、雨合羽などを着用する。
	樹幹への薬剤注入	樹幹の地際に注入穴を開けて薬剤を注入する。幼虫は吸い上げられた薬剤を含んだ木質部を食べることで死亡する。	既に弱っている樹木では、薬剤の拡散・浸透が進まない可能性がある。 蛹には効果がない。
	生物農薬	天敵線虫製剤を隣接するフラス排出孔から注入し、樹体内の幼虫を殺虫する。	乾燥や高温は線虫の活性の低下を招くため、処理時は曇天が望ましい。
被害木 (伐採木)	破碎処分	現地でチップパーにより破碎処分する。 または、伐採木を防風ネットまたはビニールシートで覆って逸出防止措置をした上で近隣のチップ工場に運搬し、破碎処分する。	チップの厚さは 10mm 以下程度とする。可能であれば同時に伐根して破碎処分する。伐根できない場合、切株をビニールシートで二重に被覆する(2 年程度)。
	焼却処分	伐採木を防風ネットまたはビニールシートで覆って飛散防止措置をした上で焼却施設に運搬し、焼却処分する。	可能であれば同時に伐根して焼却処分する。伐根できない場合、切株をビニールシートで二重に被覆する(2 年程度)。
	くん蒸	伐採木全体をシートで覆い、ガス漏れしないように密閉して、くん蒸処理をする。幼虫は呼吸によりガス化した薬剤を取り込み死亡する。	気温が低い時期や日陰の場合は、くん蒸期間を長くする。周囲への影響に配慮する。

作業上の注意点等

- ・防除作業を行う前に、対象地の所有者・管理者の承諾を得る。必要に応じて、地域住民にも防除の目的や活動内容を周知する。
- ・伐倒した被害木等は、放置せず、速やかに処分する。内部に生きた幼虫がいる樹木を運搬することは、地方公共団体が処分のために一時的に行う場合や、ボランティア等が小規模に行う場合(条件あり)は特定外来生物の飼養等禁止の例外規定に該当する(事前に規定をよく確認すること)。
- ・伐採した後の切り株にも幼虫が穿孔していることがあるため、伐根や断面の処理等を適切に行う。
- ・薬剤を使用する際は、薬剤ごとに定められた使用対象、使用方法、使用回数に関する制限を守り、周辺環境に配慮し、飛散防止を徹底する。
- ・鋭いアゴで手指を咬まれケガをするおそれがあるため、手でつかむ際には背中から持つようにし、保護手袋(軍手等)を着用する。

出典・参考資料

- ・侵入生物データベース > 日本の外来生物 > 昆虫類 > クビアカツヤカミキリ (国立研究開発法人 国立環境研究所)
<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/60560.html>
- ・特定外来生物同定マニュアル 昆虫類 (環境省 自然環境局) https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/manual/6hp_konchurui2.pdf
- ・クビアカツヤカミキリの被害からサクラ・モモ・ウメを守るために(大阪府,2020)
- ・クビアカツヤカミキリ被害対策の手引書(改訂第 4 版)(行政担当者・施設管理者の皆様へ)(地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所,2022)
- ・クビアカツヤカミキリ防除対策マニュアル 改訂第 3 版 (栃木県,2022)
- ・サクラの外来害虫“クビアカツヤカミキリ”被害防止の手引 第 6 版 (埼玉県環境科学国際センター,2022)
- ・愛知県の外来種 ブルーデータブックあいち 2021 (愛知県,2021) p.83 クビアカツヤカミキリ (戸田尚希)

哺乳類

鳥

類

は虫類

両生類

魚

類

昆虫類

甲殻類

クモ類

貝類

植

物